

P. B. シェリーの「マブ女王」翻訳

―第4編から第5編まで

池 田 景 子

1. はじめに

長編詩「マブ女王―哲学詩 (*Queen Mab: A Philosophical Poem*)」は、イギリス・ロマン派詩人 P. B. シェリー (P. B. Shelley) の初期作品群における代表作のひとつである。シェリーは1812年4月から1813年2月半ばに作品の大部分を執筆し、1813年5月21日に印刷に回し、同年12月末に書籍として形にする。作品の構成は、冒頭の献辞詩「ハリエットへ (To Harriet)」と9編から成る本文の韻文、散文で書かれた膨大な注である。献辞詩はシェリーの最初の妻、ハリエットに捧げられ、彼女への愛を歌ったものである。第1編から第3編までのストーリーを簡単にまとめると以下の通りである。満月の夜、妖精の女王であるマブは、馬車に乗って現れ、少女アイアンシーの魂を呼び覚ます。マブ女王はアイアンシーの魂を馬車に乗せて空から世界を鳥瞰しながら、人間の歴史と悪を話して聞かせる。第4編と第5編は第3編に引き続いてマブ女王によって人間の悪が風刺される。本稿では第4編から第5編までの韻文を翻訳したい。

2. テクストの翻訳

第4編

[女王は話を続ける]

今夜はなんと美しいことか！春の西風が
最もかぐわしい吐息を晩の耳に吹きかけるが、
その吐息は、この動きのない光景を包み込む
言葉の交わされる静寂とは調和しない。漆黒の天蓋は
言いようもないほど明るい輝きを放つ星でちりばめられ
天蓋には、雲で覆われていない月の壮大さが隈なく立ち込める。
この天蓋は、愛が眠れる世界に幕を張ろうと
広げた覆いようにも見え、彼方のなだらかな丘は
足跡の付いていない雪をまとっている。
彼方の暗い岩には氷柱が下がっており、
その氷柱は穢れを知らぬ美しさのあまり、きらきら輝く白い尖端が
月の光を染めることもない。彼方の急な坂には城郭がめぐらされ
その旗が古ぼけた塔の上にも所在なげにぶらさがっているので
恍惚とした空想はそれを平和の比喩と考えてしまう。これでひとつの光景なのだ。
そこでは沈思黙考の孤独がこの世俗の世界よりも上方へと
自分の魂を高めるのを好むだろうし、
かき乱されることのない沈黙が非常に冷たく明るく静かに
ただ見守っているのだろう。

南方では

太陽が波のない海原の上を
やさしく微笑みながら沈む。最も微かな吐息も
穏やかな海の深みに小さなさざ波を立てることすらない。晩の雲が
名残りの日光を反射して

西方の大海に映った宵の明星の姿は
美しく風いである。明日は来るのだ。
雲の上に雲が、次第に濃さを増していく黒い塊となって
暗くなった海上を流れていく。遠くでとどろく雷の
低い音が厳かに響いてくる。
嵐は暗闇に翼を広げて
暗闇は荒れ狂う大波を覆い隠す。容赦ない悪霊が
風と稲妻とともにやってきて獲物の跡を追う。
引き裂かれたような深い裂け目が現れると、船は尖った角のある深淵の下に
墓を見出す。

ああ、弓形の天門を燃えるように輝かせる
あの陽光はどこから来るのか。銀色の月をもかき消す
暗赤色の煙はどこから来るのか。星の光は
暗闇に消え、純白でぴかぴか光る雪が
周囲で増す暗闇の中で幽かにきらめく。
あのとどろきに耳を傾けよ。その響きは耳を聳して疾く過ぎ去り、
山々で数え切れぬこだまとなって、
青白い顔で星のちりばめられた玉座に座す真夜中を驚かせる。
今や混ざり合う騒音がだんだんと強くなる。短い間隔で
爆発する爆弾を恐れる振動、
弱まる光、甲高い叫び声、うめき声、悲鳴、
止むことのない騒音、憤怒に我を忘れた
人々が殺到する様。騒々しく、さらに騒々しさを増して
不協和音が大きくなっていく。血の気のない死が幕を閉じ
征服した者にも征服された者にも
血のついた冷たい屍衣をかぶせるまでは。日没の光が
活力と誇りにあふれた健康に花咲いていると認める人々のうち、

日没に際して不安げな生命力で鼓動する人々のうち、
生き残る者はいかに少ないことか。今なお鼓動の続く者はいかに少ないことか。
すべては深いしじまであり、嵐の不吉な兆しを宿した休止の中で
眠る、恐ろしい風のような。

ただし、寡婦の恋情が狂乱して叫ぶ声が
突風に身震いしながらやってくることや、
身もだえする力を包む土の身体から、魂がはじけるときの
人々の微かなうめき声が聞こえてくるのを除いては。

どんよりとした朝が

悲しみにあふれた光景にやってくる。硫黄のような雲が
氷のような風の前にゆっくりと流れ去っていく。
そして、凍るような朝の明るく輝く光が
ぴかぴかした雪に沿って踊る。そこでは、森の奥まで続く
血の痕跡と、散らばった武器と、
死神の我欲さえも変えることができなかった顔立ちをしながら
こと切れた武人たちが、出撃する征服者の辿る
怖ろしい道に跡を残している。はるか背後では
真黒な灰燼が彼らの誇り高い町があった場所を示している。
向こうの森には陰鬱な峡谷があり、
どの木々もその暗さを日の光から守りながら
武人の墓上で揺れている。

私は汝がひるむのを目にする、
凌駕する精霊よ。そうでなければ汝は人間なのか。
疑念と恐怖の陰が汝の汚れなき顔立ちに
浮かぶのが見える。だが、恐れるでない。
これは無縁の苦悩でもなければ、
自然に発生したものでも、取り返しのつかないものでもない。

人間の邪悪な本質とは、支配する王や
卑屈に腰をかがめる臆病者が、数え切れない罪のために
唱える弁明であり、血を流すこともなく、
不和のせいで疲弊してしまった国を荒廃させるものだ。
王、司教、政治家は戦争を引き起こし
その安全は和らげられることのない人間の深い苦悩であり、
その尊大さは人間の墮落なのだ。斧で
その根を断ち切れ。毒の木は倒れるだろう。
その木の毒がこもった発散物は
荒廃、死、苦悩を蔓延させ、何百万もの人々が
ヘビのような飢餓を和らげ、自分たちの骨を
腐敗した突風の中葬られずに白くする。そんな所に
ひとつの園ができ、その美しさにおいては
伝説のエデンを凌ぐものとなるだろう。

自然の魂は

世界をこれほどまでに美しくし、大地の膝を
たっぷりと広げ、生命の最も小さな和音も
不変の斉唱に調音させる。さらに、楽しい鳥たちには
森の住処を与え、海の放浪者たちには
広大なわだつみの心地よい沈黙を譲る。
そして、土の中でうごめく最も卑屈なウジ虫には
精神、思考、愛で満たしてやるのだ。唯一人間は、
正当な理由のない悪意を偏重して、気ままに
退廃と不品行と屈従を重ねていき、その魂は
破壊的な呪いで枯死した。一時的に華々しい幸福を
遠くに追いやり、その理解を遠ざけて、
その歩みの下で大きく裂けた

恐ろしい深淵でまぶしい陽光に奉仕するだけとなるのか。

自然よ、否。

王、司祭、政治家は人間の花を枯らしてしまう。

たとえその花が華奢なつぼみであっても。彼らの影響力は

希薄な毒のように、荒廃した国の

血の気のない血管中を駆け巡る。子どもは

舌足らずに母親の聖なる名前を呼ぶ前に

犯罪を残酷にも誇る気持ちでいっぱいになり、

英雄にでもなったかのような気分で子ども用の剣を振りあげる。

こんな子どもの武器が荒廃した大地を

最も血塗られた鞭で打つようになるのだ。片や、まことしやかな名前が

しなやかな子ども時代の、疑うことの知らない時期に教えられて

詭弁として尽くすようになる。そんな詭弁で人間性は

輝かしい理性をかすませ、兄弟の罪なき血を流すために

振り揚げられた剣を正当とする。力と

虚偽がゆりかごで寝かしつけられた赤子の上に覆いかぶさり

生まれつきの善すべてを最も荒っぽい掴み方で抑えつけているなら、

司祭に導かれた奴隷たちには、人間が

悪徳と悲嘆を受け継いでいると言い触らすのをやめさせよ。

ああ！新参者の魂が初めて新たな住処から

顔をのぞかせてあちこちへと

幸福と共感を探しに行くとき、その魂にとってこの広い世界は

どれほど厳めしく荒涼とした行路であることか！

天性の善にある蕾すべてがどれほど萎びていることか！

容赦ない力の猛烈な嵐から身を守るための

覆いも避難所もないのだ！そのみじめな身体は

おそらく病と不幸に毒されていて
道徳、法、慣習によってその魂が生まれた
みじめな親に病と不孝が積み上げられていたのだ。
そんな魂のみじめな身体には
バッタを活気づけるような、天の穢れなき風も
吹くことはないだろう。日の汚れない光も
その住処に訪れることはないだろう。魂は生命が宿る前に
縛られている。そうだ、魂が存在する前に
すべての鎖は鍛えて作られるのだ。あらゆる自由と愛と
平和はその無防備さから引き裂かれてしまう。
生まれたときから呪われ、ゆりかごにいるときから
屈辱と束縛に運命づけられている！

この多様で永遠の世界を見渡しても
魂だけが唯一の要素だ。数えきれない年月の間
山の重みを支える不動の支柱を
そのままにしてきた岩塊は
活動する、生きた精神なのだ。どの粒子も
統一体においても部分においても敏感で
最も微小な原子も愛や憎悪の世界を
理解している。これらは
善悪を生むがゆえに、真実と虚偽がわき起こる。
ゆえに意志と思考と行動、苦痛と歓びの
すべての萌芽として、永遠なる宇宙を変化に富ませる
共感と憎悪が生じるのだ。
純粹な天体の光がすばやく辿る道筋のまわりで
大気の汚れが地球から発生する前は、

魂は天体の光と同様に汚染されていない

人間とは魂と身体から成り、不屈の行為のために
形作られ、想像力の大胆な翼にのって
疲れも知らぬまま飛び立ち、豪胆にも最も激しい煩悶を
安らぎへと変え、入り混じった感覚と精神が
もたらす喜びを味わう。
あるいは、人間は屈辱と悲嘆のために形作られていて
自分の恐怖という掃きだめの上に這いつくばり、
あらゆる音にも縮み上がって、肉欲主義に見られる自然な愛情の
炎を消して、自分の無価値な日々の中で
死の凍のような手が時間を封印するときに
自分の時間が祝福されたものだとかかりはするが、
病を憎みながらもその治療を恐れるのだ。
前者は、今後も必ず存在する運命を背負う人間である。
後者は、今日悪徳が作り出した人間である。

戦争は政治家たちの娯楽であり、司祭どもの喜び、
法律家の戯れであり、雇われた刺客のお取引、
そして、裏切りと血糊に満ちた犯罪で買い取った
卑しい王座につくような殺人王らにとっては
自分たちが食べるパンであり、よりどころなのだ。
血のように赤い制服を身に着けた護衛兵はそんな王たちの
宮殿を取り囲み、武力が守備する
犯罪に与り、国民の憤りから
王位を守るが、そこにはあらゆる呪いが及び、
飢饉、狂乱、悲嘆、そして赤貧が息づく。

こういった奴らは暴君の玉座を守る
雇われた殺し屋なのだ。暴君の恐怖のもとで動くごろつきなのだ。
こういったものは最もひどい悪徳のはきだめや川床であり、
社会の廃物、最もさもしいものすべての
おりなのだ。そいった奴らの冷たい心は
欺瞞に過酷さを、無知に傲慢さを混ぜる。
卑屈で極悪非道なものすべてに、善の
絶望と自己内省のみが火を灯すだろう怒りを混ぜるのだ。そんな心は
富や名誉、権力で飾られ、自分の仕事をしに
方々に送られる。陰鬱な勝利を掲げて
もったいぶった足取りで東方の国を歩く伝染病は
破壊力が小さくなっている。奴らは賄賂や
名声を約束することで、すでに隷属状態で押しつぶされている
思慮のない若者を甘い言葉で惑わす。若者は
自分の惨めさに気付いても時すでに遅く、自分の運命が
金と血で封じ込まれてしまったら自分の破滅を
悔いる気持ちを抱くことになる。
法の仕掛け網で正義の足を
釣りこむのがお上手な、暴君に仕える者らも
さらなる弱者を圧迫しようと準備している。
そんな奴らは正しかろうと間違っていようと、公共の美德を冷笑して
金のために擁護するが、公共の美德のもとでは
奴らの容赦ない足跡が踏み荒らされて割れているのだ。その状況で、
時は真実が売られているのを見てほほ笑む。

それから厳粛で白髪の偽善者たちが
希望も情熱も愛もなく

贅沢な暮らしや嘘を通して
お世辞によって権力の座席へと這いつくばっていき
自分たちの名誉が流れ出す源となっている体制を支持している。
奴らには3つの文言がある。暴君は自分たちの消費をよくわかっていること、
暴君は自分たちの借金を上手に支払ってくれること。世の中から離れた
高利貸しとともにあること。すなわち、神、地獄、天だ。
復讐心に燃え、容赦ない、圧倒的力を持つ悪魔は
その情けは、血に飢えた、飼いならされていない虎の
逆鱗を誤称するものである。
地獄は、永劫燃える火の深淵であり、
そこでは、有毒で不死の虫が
犯した罪のために贖罪の人生を送る奴隷に対して
永遠に続く惨めさを引き延ばす。
そして、天は人間の本質について大胆にも中傷し、
地上の権力をあざける前に
身震いして、信じ、畏縮する人々にとって報いとなる。

これらの道具を暴君は自分の仕事に合わせて
激怒の折に巧みに使う。意志を壊すとき
邪悪さにおいて無限の力を持つ。同時に、
若さはひょっこり現れ、年齢は腐り、男らしさはふがいなく
入札を行い、震える腕の弱さに力を貸す
短命の喜びによって贈賄される。

人々には興亡がある。
ひとつの世代がやって来ては
その収穫物を破壊の大鎌へと明け渡すのだ。

その世代が姿を消して、別の世代が花盛りとなる。だが、見よ！
暴君がその花盛につけた痕跡は赤く光り、
その受動的な全盛期をしおれさせて腐敗させる。
暴君は、おのれの空虚な心と同じく中身がなく無益な
虚言や虚偽のふるまいを考案してきた。
曖昧な意味は、多音の割に意味をなさず
餌食にされる無思慮な者を労苦へと誘惑するために
楽園の谷に広がる。

おのれ自身に目を向けよ、司祭、征服者、君主よ！
汝の商いは欺瞞なのか、汝の欲は
その主とともにいる
貧者の稼ぎの中にどっぷりはまっつのたうつのか。また、汝は
無数の虐殺された者の上で、おのれの短い名声を担保に
秤にかけても何にもならない苦悩を数え上げることに喜びを見出しているのか。
汝はうめき声をあげる国、虚飾で満足してきた王に
怯懦や犯罪をしょい込ませるのか。哀れなおのれに目を向けよ！
やはり、汝はおぞましい地上を常に
腹ばいになって進む、正真正銘の奴隷ではないのか。汝の日々は
あっけなく大儀なものではないのか。
夜の長い拷問台が終わる前に、汝は
「いつ朝が来るのだ？」と叫ばないのか。汝の青春は
快楽主義を無駄に、そして熱っぽく夢見るものではないのか。
汝の男盛は早すぎる病でしおれていないか。
死を後悔なく見つめることは
わびしく、楽しみもなく、恐ろしいことではないか。汝の精神は
活気のない身体と同様に病的で

判断、希望、愛に対して無能ではないのか。

そして、汝が引き延ばして握っている

みじめな利益にならって

善への共感すべてを締め出した後も生き残るため、過ちを望むのか。

墓が汝の記憶と汝自身を飲み込んでしまったとき

汝は地上に毒を盛ることになる命とりを欲しがるか。

その命とりは、納棺された汝の土くれの周りにその根を攪り合わせ

汝の骨から吹き出して、汝の墓上で花咲かせる。

汝の赤子が食して死ぬかもしれない果実の命とりを欲しがるか。

第5編

[女王は話を続ける]

このようにして地上の世代は

墓へ行き、子宮から発生して

世界を刷新する不朽の変化が起こった後も

生き続ける。あたかも終わりに近づく年の

霜枯れさせるような厳しい風が

森の土壤に飛散して、そこに

何年もの間積もらせてきた葉のようだ。ただし、

その葉は忌まわしい腐敗で地面に

約束を孕んだ萌芽を仕込みつつ

長い間、息苦しい思いを抱えてはいるけれども。

しかし、葉が落ちて背の高い木々から美しい姿が奪われ

地面と水平に横たわり地上で朽ちていくとき

自分たちが長い間その美を損なってきた土地を肥沃にして

息づく芝原から若さ、誠実、美しさの森が生まれ、

そこに活気を与えたもののように、生まれては死んでいく。

このようにして、自暴自棄な利己性は
大らかな心の最も美しい感情をしおれさせ、
朽ち果てる運命にある一方で、土壌からは
あらゆる徳、喜び、愛が発生して
決断が情熱の抑えがたい軍勢と
不自然に戦争するのをやめるだろう。

宗教の双子の姉妹、利己心よ！
犯罪と虚偽において競争相手であり、血なまぐさい
遊戯という無慈悲な参事をすべて猿真似している。
だが、冷淡で、かつ冷徹で、気力がなく
光を避けてその名前がない。
その不格好さゆえに、正義という名の脆い覆いで
魅力的ではない容貌を隠そうと駆り立てられ
何も知らないひな鳥を除いてあらゆるものを怖がらせる。同時に、
これが専制政治の因果なのだ。
恥知らずで、人情を解さず、肉欲的で下劣だ。
分かち合うことがない喜び、汚い報酬や名声よりも
もっと高貴な力によって不動となった心で
その浅ましきだけへの愛には無感覚になっている。
自らのみじめな存在を軽蔑しながら
未だにその存在を熱望し、解放することを恐れるのだ。

それゆえに商業が起こり、人間性や人為をめぐる
金銭次第のやりとりが生じる。
それを富で購入すべきではないが、欲しいと思って要望し、
自然に湧き上がる親切心から、急いで支給しようと

限りない愛で満杯になっている泉から引き出そうとする。
だが、いつも妨げられて精根尽き、今や穢れてしまっている。
商業よ！その毒を吐き出す陰の下で、
孤独な美德は敢えて生じることはなく
貧困と富が互角の手で
しなびさせる呪いをまき散らして、時期尚早で
非業の死へ向かう扉を開く。
やせ衰える飢饉と十分に養われて増長した病に対して開く。
毒されて、身も心も足かせを引っ張ることがほとんどできず、
その鎖も伸びるところまで伸びて後ろでガチャガチャするような
そんな人間の生における運命を分かち合う者すべてに対して開くのだ。

商業は利己心の刻印、すなわち
すべてを奴隷にする力の認印を
輝く鉱石に打ち、それを金と呼んできた。
その偶像を前に、偉大なる民衆、
いたずらに富裕なる者たち、傲慢な心を持ったみじめな人々、
百姓や貴族、司祭、王侯の群れがお辞儀をして
盲目なる気持ちで権力を崇拝するが、
虐げられて不幸のちりへと摩滅させられるのだ。
ところが、金目当てに働く人々のいる寺院では
金は生きている神であり、軽蔑の眼差しで
美德以外の地上のすべてのものを支配する。

暴君は人間の命を売却して
贅沢を重ねた末に肉欲に耽り、名声を
広汎に浪費して強欲な高慢へと塗り変えていくので

成功はだまされやすい世間に対して
破滅、恥辱、戦争の悲痛を正当と認める。
独裁君主は、大勢の盲目で無抵抗なまぬけが
何人いるかを数えるのだ。そして、独裁者は
弾圧や飢饉によって追い詰められた奴隷に
低俗な主のもとで冷たくて横暴な骨折り仕事を
こなせと仕向けるように、おのれの策略で選んだ
傀儡たちを会議室から思いのままに動かす。
その傀儡たちは、希望に対して無感覚で、恐怖も感じず、
死んだ機械をほとんど生気のないまま引っ張っていき
仕事を回す単なる車輪として、商売上の品物として
富という高慢で騒々しい虚飾に光彩を与える者たちなのだ。

人間の平和や幸福は
国家の富に屈する。人間の本質を
誇りの天国へと引き上げるものは
人間の魂を毒すものと引き換えに売り飛ばされる。
高くそびえる人間の希望を地上へと引きずりおろす重石は
自分勝手に儲ける以外の展望すべてを挫折させ、
奴隷のように卑屈な恐怖以外の情すべてをしなびさせ、
進取の気概を愛好する自由で寛大な気持ちを
消滅させ、感覚と解け合おうと
空想が鼓動する心臓で燃え上がる、
そんな脈動にも公然と対抗する。破壊があるのみだ。
自己の下劣な欲、利益と金に対して
卑屈を望む気持ち以外に何も残らない。
偽善が人を不能にして、交際もさせず、

救うこともしないのだ。

そして、政治家は財を
自慢するのだ！言葉を尽くした雄弁術は
その心臓が崩壊した後も生き
国家の不幸という弊害に金メッキを施せる。
また、盲従する群衆の崇拜を
鉄で蹂躪され押しつぶされた美徳から
腐敗してけばけばしい偶像、名声へと向けることができる。
ただし、その幻惑するような台座が
手足のばら撒かれた荒野の恐怖の中で建てられ
そこでは荒廃した住居が煙を立てている。
逸楽の人は自分の家の暖かい炉端で
おのれの人情に生じた身もだえする本質を
慈善交流という行いに限定したり、
お上品さと偏見による
慣習法をかりうじて履行することに限定する。
そして、冷たい詭弁法にかつがれてしまう。彼は
おそらく地上の平和が壊滅したことに
かりそめの涙を流すが、そのときには自分の家の扉近くまで
恐ろしい波が押し寄せてきているのだ。あるいは、自分の息子が
暴君に殺されたり、宗教で
自分の妻が狂乱に陥ったりしているのだ。しかし、
その貧しい人の人生は苦悩、恐怖、気苦労である。
その人は朝目が覚めて気づくのは成果の上がない仕事のみで
飢えた子らの叫び声を絶えず耳にする。
その子らの母親は青ざめた顔で我慢強い目をして

常にその人を見つめる。傲慢で金のある男の目は
命令をぱっと放ち、自分自身のような何千もの人の
悲痛な場面にちらりと見る。そんな人は暴君の
美辞麗句にはほとんど注意を向けない。そんな人の憎悪は
その悪行と同様、消すことができない。そんな人は
言葉が虚栄心から辛辣にあざけることを蔑んで笑い、
暴君の行為に恐怖を感じて
力の武器によってのみ遠慮がなくなる。
その力の武器こそ暴君の悪意を知っていて恐れている。

赤貧が持っている鉄のむちはいまだ
おのれの奴隷が採算の取れない労働をして
富や毒に膝を屈するように強要する。
慰めのない人生であるがゆえに、奴隷は
自分が盲目にも運命につながれていることに気づけない。
自然は気前のよさにおいて公平なので
人間にはすべてを征服する意志を授けた。
事物は移ろいやすい形をなして
人間の足もとで思うように形作れる状態にあり、
拘束性のために弱くなっており、人の足が踏みつけるとその形は震える。
どれほど多くの田舎者ミルトンが心に溜めて言葉にしなかった
憧れを抑え込みながら、通り過ぎて行ったことか。
どれほど多くの無教養なカトーが、その当時奔放だった心血を注いで
かんぬきを形作ったり、釘を製作したことか。
どれほど多くのニュートンが、無限性を飾る偉大な天体は
金銀糸の斑点にすぎず、天に固定されて
自分の故郷の町の真夜中を照らすただけだと不本意にも気づいたことか。

けれども、どの人も完全性へ向かう萌芽を持ち合わせている。

地上にいる賢者のうち最も英知ある者も

常に理性の蓄えから

沈黙と真実、美德の恐れを抱かない声色を引き出しはしたが、
一介の弱くて経験のない少年だったのだ。

高きところにおわす存在は、一点の曇りもない頭脳を持ち

その方の穢れの無い情感、高尚な意志には

死神さえも服従させることができないだろう。

なぜなら、死神は畏怖の念を抱いて

その高貴な存在の中に長くとどまっているだろうから。

そんな方と比べると、地上の賢者は

傲慢で肉欲的で冷淡で、純粋な願望や

普遍的な愛に染まっていない。

ある腐敗した都市の墮落を通して

今や悲しい人生を引きずるあらゆる奴隷は、

飢饉で憔悴しては、贅沢で増幅し

気高さに見られる鋭敏な感覚を鈍らせ

視野の狭い企てや価値のない気苦労を抱えているか、

暴力的な犯罪すべてを性急に行い

自分の魂が深刻に停滞しているのを動かすために

その高貴な方を模倣し、肩を並べようとするのだろう。

だが、卑しい欲望は

その鎖を地上にしっかりと縛り付けているので

美德を備えた人間を除いて、地上の者すべてが

賄賂で自由になる。断固として

不変の意志を持つ人間を除いたすべての者からすると、

金もしくは名誉は、必ずや自分勝手に付けた言い値に達するであろう。

お追従を言う群衆が拍手喝采を送っても
腐敗する贅沢を卑劣にも喜ぶことがあっても
美德の人間は賄賂に耳を傾けず、たとえ人々が
血で真っ赤に染まった手で世界の笏を振るったとしても、
その高尚な魂を暴君や偽善に屈従させることはできない。

すべてのものが売られている。まさに天国の光すらも
買収できるのだ。大地が惜しげもなく与える愛も、
深みという深淵の中に潜む
最も小さくて軽蔑に値する物事も、
われわれの人生における目的すべて、人生そのものさえも、
そして、自由や人間の親交が法律の認める範囲で
ごくわずかにあてがわれることも、
人間の愛という心が本能的に実行を促すはずの義務も、
売買されている。まるで目立たない形の
自分本位な気持ちで公の市場が運営され、それぞれに
値段を付け、自分の支配力の刻印を残そうとしているかのようだ。
愛でさえも売られている。あらゆる悲嘆への慰めは
最も致命的な苦悶へと向けられ、老齢は
自分のことしか考えていない美女のへどが出るような腕の中で震える。
そして若者の腐敗した感情は交際という
希望を挫くような悩みの種から人生の恐怖を用意する。
一方で、楽しみのない肉欲主義から生まれた悪疫は
根絶しにくい悲嘆で人生を満たす。

欺瞞は憤慨した良心のあえぎに金だけを支払うよう
要求する。というのは、奴隷のように卑屈な司祭は
報酬目当てのおのれの信仰にそれほど大きな価値を置かないからだ。
かりそめの小さな虚飾、こびへつらう幾人かの魂は
大事をとって怯懦の気持ちそのもので鎖につながれたり、
金銭欲がほんの少し余分に寄付をして贈賄し、
自分たちのけだるい情熱を感じる勝利感を飾ってくれる。
そんな虚飾や魂は司祭を暴君のしもべにしてみえるのだ。
もっと大胆な犯罪がより高尚な報酬を必要としている。
身震いせずに、奴隷兵士は殺人行為に
手を貸して心を鬼にするとき
死にゆく者たちの恐ろしい雄弁さが
名声のわびしい戦場で低く混ざり
本来の姿を責め立てる。その本来の姿ゆえに送られるはずの拍手喝采を
彼は売ってしまったのだから。それも、愛国主義の暴徒が送る低俗な
祝福を得るためだ。冷酷な王から卑しくも感謝を表してもらったためだ。
そして、冷たい世間からお褒めいただくためだ。墮落もいいところだ！

より高貴な栄光がある。その栄光は
人間が姿を消しても生き残り、人間が抱える
すべての不安を和らげ、その変化と同時に生じる。
それは、美德を地下牢の暗闇に捨て置かず、
宮殿の城内で、犯罪の迷宮を
通ってその歩みを案内する。人間は
権力の復讐をする手から、その最も早く、最後の、高貴な称号を
死を受け取るときでさえ、
その顔つきに豪胆さを染み込ませる。

善の良心は、金でも
下劣な名声でも、天国の祝福への希望でも
買えない。善の良心を手に入れるのは、決然とした善の生命や
不変の意志、普遍の幸福を願う
抑えがたい願望、その中で一体となって脈打つ
心臓、末永く続く安寧のために、理性の豊かな貯蔵を
変えようと骨折る、常に目覚めた状態の英知を持った頭脳なのだ。

最も誠実な美德を通商するには
利己心が示す仲介の合図や
卑劣な報酬をねたんで取引することや
冷たくて時間のかかる打算のつり合いを取る必要はない。
正しく公平な物差しで、すべては重さが量られている。
ひとつの天秤には人間の安寧の総計が
もう片方には善人の心が載せられている。

美德以外の何物にも

幸福を、利己主義者が追求するのはなんと無駄なことか！
盲目で冷淡な彼らは、苦労の嵐の中で平和を求めて希望するが、
どうやって使うのかわからない権力をむやみに欲しがる。
そして、人には与えようとしない喜びを求めてため息をつく。
狂乱したように、自分たちの計画を未だに無効にする。
そして、美德が描く静けさではあるが、魂の苦痛や
泣き言を言う後悔、無駄な悔い改め、
病、むかつき、疲労が行き渡るものを利己主義者が希求するとき
無価値で恥ずべきものが存続する。
だが、白髪頭の利己心は致命的な打撃を
感じて墓へとよろめきながら進んでいく。

より輝かしい朝が人間の日を待ち
そのとき大地の自然な授けものを移すことで
言葉と仕事をうまく交流させることになるだろう。
悪名、病、悲嘆を恐れる気持ちは
無数の戦慄と戦い、荒々しい地獄は
時の記憶の中でのみ存続して
悔い改めた道楽者のように活動しはじめ
振り返り、もっと若かりしときに思いを馳せて身震いする。

* 翻訳テキストの底本としては以下の参考文献を用いた。

参考文献

Shelley, Percy Bysshe. *Shelley's Poetry and Prose: Authoritative Texts Criticism*.
Eds. Donald H. Reiman and Neil Fraistat. NY: Norton, 2002.